

週刊センターニュース No.294



第294号(2010年1月25日) 毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

〇●〇 第255回共同学習会のご案内 〇●〇

日時: 1月26日(火) 16時30分—18時00分

会場: 角間キャンパス総合教育1号館6階 E1講義室 ※開催曜日および開催場所にご注意下さい。

テーマ: 「金沢大学ラーニングコモンズにおける学習支援・運用を考える」

企画者: 山田政寛(大学教育開発・支援センター)

講師: 岡部幸祐(金沢大学情報部情報サービス課)

概要: 来年度より金沢大学中央図書館内にラーニングコモンズが作られる。2階にはカフェイベント開催のためにプロジェクターとスクリーンを併せ持ったカフェ、3階には図書館内の情報ソースやインターネット上の情報ソースを複合的に利用するグループ学習、動的なグループ編成とアクティブラーニングを支援するラーニングコモンズを設置する。

しかし、ラーニングコモンズにおける学習支援では何を支援すべきか、支援方法としてどうあるべきかについて未だ議論がされている状況にある。今回は情報部情報サービス課 課長 岡部幸祐氏に中央図書館に整備するラーニングコモンズの概要と現在の国内外におけるラーニングコモンズの現状についてお話し頂き、金沢大学ラーニングコモンズにおける学習支援のあり方について検討したい。

〇●〇 第254回共同学習会 実施報告 〇●〇

2010年1月21日、本学総合教育1号館会議室にて第254回共同学習会(主催: 大学教育開発・支援センター)を実施した。今回の共同学習会では矢野真理子氏(博報堂 マーケティングセンター)、武谷真由美氏(花王株式会社 生物科学研究所)より、「未来への好奇心の種をまく!サイエンスコミュニケーション」というテーマで講演をいただいた。

講師の2人は国立科学博物館の平成19年度サイエンスコミュニケーター養成講座SC1修了生で、当時大学院での自身の研究とサイエンスコミュニケーション活動を両立してこられた。その活動成果であるミュージアム学習支援グッズ「おとなび」は利用者から高い評価を得ており、読売新聞でも取りあげられたほか、彼女たち自身が第45回東京地区教員研修館理科部会、全国科学博物館協議会にて報告を行っている。筆者が参加したサイエンスアゴラ2008で「おとなび」を知り、出張報告の一部としてセンターニュース第237号^(注1)でも写真付きで記事を掲載した。

本共同学習会の進行は、まず矢野氏よりサイエンスコミュニケーションの歴史や日本でのサイエンスコミュニケーション活動を解説してもらい、次に武谷氏より国立科学博物館で受講したサイエンスコミュニケーター養成講座の内容と「おとなび」の紹介、そして彼女たちがサイエンスコミュニケーション活動をとおして得た経験について語っていただいた。

(1) 矢野氏の講演要約

サイエンスコミュニケーションとは、「従来の科学者から門外漢への一方的な解説ではなく、互いの考え方や理解力に勘案した、双方向のコミュニケーションを促進することにより、科学技術が一般社会に自然に浸透していくことを目指す活動」のことである。この役割を担う人をサイエンスコミュニケーターと呼ぶ。

サイエンスコミュニケーションは1990年代にヨーロッパ諸国で発達した。狂牛病問題で市民に広がった科学への不信感を解決するため、専門家と市民が意見交換したことが始まりとされる。

講演では、特に「科学を分かりやすく伝える」ことに焦点を当てたサイエンスコミュニケーション活動が取り上げられた。英国エディンバラの「サイエンスフェスティバル」、日本の「青少年のための科学の祭典」、「コズミックカレッジ」などの例示とともに、科学にふれる機会が増加している現状が伝えられた。また、講義・資金獲得・論文投稿・学会発表・地域貢献活動を通して自分の研究や専門領域を説明していかなければならないという観点から、大学・研究機関構成員に対するサイエンスコミュニケーションの重要性を強調した。

(2) 武谷氏の講演要約

講師の2人が受講した国立科学博物館のサイエンスコミュニケーター養成講座SC1は、サイエンスコミュニケーション全般、サイエンスライティング、博物館の展示、研究機関・メディアのサイエンスコミュニケーションなどで構成され、座学17コマ、課題研究17コマにのぼる。課題研究は、大学院での自分の研究を市民に分かりやすく伝えるための実習を主な内容とする。

SC1の講座終了後、武谷氏・矢野氏はサイエンスコミュニケーション活動として「おとなび」の制作を行った。「おとなび」とは「大人+NAVIGATION」に由来する国立科学博物館地球館2Fたんけん広場の展示案内パンフレットで、「子供たちにとって最も身近な存在である親から科学の面白さを伝えてもらうこと、そして親子の会話を促進するツール」を意図して作られている。フロアにある18個の展示を一枚の紙で網羅するとともに、(1)展示の見どころ、狙いが分かる一言、(2)会話を続けるためのもう一言、(3)簡単な解説が、それぞれの展示について写真と一緒に印刷されている。簡単にポケットに出し入れできるための工夫（ミウラ折り）と、アーク放電・ベンハムの円盤などの展示物の簡易な解説が盛り込まれている（おとなびの写真や他の特徴、利用者アンケートの結果はセンターニュース第237号^(注1)にも記載がある）。

武谷氏の講演より、サイエンスコミュニケーション活動を通して得た彼女の実感をまとめていくと、おおよそ次のようになる。まず、科学者というものは単に研究だけすればよいというのではない。自分の研究内容を論文、学会発表、研究費請求などで他者に伝えていく義務がある。それも、ただ主張すればいいというわけでもない。研究・科学とは、それをやっている本人以外は難しいものであるため、伝える相手に応じて分かりやすく、伝えていく必要がある。さらに、分かりやすいだけでも不適である。正確さと伝わりやすさのバランスが不可欠である。「自分が伝えたいことを相手に合わせた伝え方で伝える」ことがコミュニケーションで重要であるということである。

(注1) <http://www.rche-kanazawa-u.jp/news/pdf/centernewsNo237.pdf>

(文責 FD・ICT 教育推進室 末本 哲雄)

○●○ 第7回大学教育セミナー開催のご案内 ○●○

主催：大学教育開発・支援センター 共催：大学コンソーシアム石川 後援：日本教育工学会

テーマ：「アクティブラーニングが創る大学教育の未来」

日時：2010年2月22日（月）12:30 受付開始 13:00 開始

会場：金沢大学サテライトプラザ（金沢市西町三番丁16番地 金沢市西町教育研修館）

プログラム

13:10-13:30 趣旨説明 山田政寛（金沢大学 大学教育開発・支援センター 准教授）

13:30-14:30 基調講演 主体的な授業を求めて—私の実践から—

赤堀侃司（白鷗大学 教育学部 教授/東京工業大学名誉教授）

14:45-15:30 講演 知識・技能・態度の全体的育成を目指すアクティブ・ラーニング

—授業デザイン評価の関連に焦点づけて—

溝上慎一（京都大学高等教育研究開発推進センター 准教授）

15:30-16:15 講演 学習空間とアクティブラーニング—東京大学 KALS の実践をもとに—

西森年寿（東京大学 教養学部附属教養教育開発機構 特任准教授）

16:30-17:20 パネルディスカッション 司会 山田政寛 パネラー：赤堀侃司、溝上慎一、西森年寿

※参加申込：件名を「2月22日大学教育セミナー参加希望」として、所属・職名・名前・情報交換会参加可否を明記の上、2月17日（水）までに電子メールにて山田まで（mark@mark-lab.net）。